

美活同源と特定地域学 ―美しい農村での儲かる農業―

蓑茂 寿太郎

公立大学法人 熊本県立大学理事長

農学アカデミーの論壇に寄稿するようにとのことである。私は33年間、母校である東京農業大学に籍を置き、4年前に法人化と同時に現職に就任した。このことにより、農村や農業を見る目が「東京から」でなく「九州で」に変わった。また専門がトータルに環境をとらえるランドスケープ分野であるので、本務の傍らではあるが、地域貢献の使命から農村と農業を俯瞰的に診ている。その一端を述べご批判を仰ぎたい。

美活同源という表現

熊本に着任して直ぐに、『熊本に学ぶ美活同源』が全国に流布するようにと願うようになった。そこで講演等の機会に私の造語「美活同源」をできるだけ使うようにした。都会では通じるランドスケープを田舎でも理解してもらうためでもあった。医食同源は聞いたことがあるが、美活同源は知らない。そんな声が返って来た。医食同源も1991年の第四版から広辞苑に登場したもので一般化したのはそんなに古くないこと。そこには「病気をなおすのも食事をするのも、生命を養い健康を保つため、その本質は同じだ」ということが書いてあることを紹介し、以下のように、美活同源について述べてきた。

活力ある地域の風景は美しい。私は高校卒業まで休耕田などない農村で育ち、減反政策が実施されるようになってからも年に数度、ここを訪問していた。そこでこれらの前後の比較観測から美活同源を導いた。ドイツの植物生態学者・

チュクセン博士は『日本の水田は正に庭園だ』と言ったが、これは減反政策以前のことで、今は耕作放棄地の荒れた農地が大きな社会問題になっている。またドイツ林学の祖・フォンザリッシュは施業林の美を「森林美学」として論じている。ツル切りと枝打ちがなされ、間伐がきちんと行われた森林は美しい風景を奏でる。林床に光が届くなら、土壌侵食や樹幹への鹿の被害も少なからう。生産基盤となっている土地は活力ある経営の下では美しい景観を呈する。農林業斜陽のままでは美しい農山村には出会えない。生活基盤としての土地も同様に生き生きしたコミュニティがあってこそ心地よい界隈をみせる。そこで、今課題の地域再生には「まず美しい環境だ」と主張している。美しい地点には人が集まり活気が溢れる。美しい風景の道筋にはたくさんの人が行き交う。そこでは定住人口の減少を交流人口が補う情景に出会う。美しい場所が点や線では非効率なので、面として美しい地域をつくる考えにたどり着く。そのような地域づくりの思いが全国展開して、先の景観法の制定となった。そこで「美しい町にするのも町に活力を沸き立たせるのも、人々の喜びを満たし、生きる力を地域に継続させるため、その本質は同じだ」と美活同源を規定することができる。日本建築学会賞を受賞したヨーロッパの建築家が、日本での生活の楽しみは何ですかとインタビューで聞かれて、『美しいものと醜いものとのギャップが大きいのに、これを埋めようとせず共存させていることに興味がある。建築も風景も』と答えていたが、これは日本の風景を見事に言い当てていると思う。これと無関係でないと思うが、熊本では環境フォト×コンテストが 2007 年から実施されている。3 年目となって私が気付いたのは、将来に残したい環境は多様多彩である。対して、取り除きたい醜い環境は数パターンに整理できる。しかしその数は多く一握りではないということである。

私が属する日本造園学会の初代会長を努め、当時東京帝国大学教授であった本多静六は、福岡市の大濠公園を設計するついでに大分の鄙びた温泉地・由布院を訪れ、視察の後にこの地の発展策を講演している。大正 13 年のことである。今や有名になった湯布院の記念すべき出来事として語り継がれている。そこからひと山越えて、今、人気のナンバーワンの温泉地が熊本県南小国の黒川

温泉である。100万人の来訪者を数え、この町は景観でも日本一の座を射止めた。美しい温泉郷では、ご多分にもれず定住人口は減少傾向であるが、交流人口が増えて活気に満ちている。これは美活同源の好例である。黒川温泉郷には24軒の旅館があって合言葉は「黒川一旅館」である。一つひとつの旅館は「部屋」で道が「廊下」という捉え方をして、ふるさとの自然、暮らし、もてなしの風景づくりを続けている。風景づくり原則を、懐かしさのスケール、暮らしの空間、天然素材の3点で定め、デザインコードをつくり、街づくり協定を制定して、取り組から20年が経過した。これが、温泉郷に止まらず、ここに至る道筋の田園風景にまで広がれば本物である。そのためには広義の地産地消である。基本は、風景を醸し出している農作物や木材を含む林産物を適切な生産価格で旅館や訪問者が消費するスタイルを定着させ、儲かる農業地帯にすることである。

特定地域学のススメ

美しい農村での儲かる農業実現に農学は役立つか？これが二つ目の関心事である。東京農大での後半の10年間は、新しいパラダイム・地域環境科学でのランドスケープ研究であった。時あたかも東南アジアからの留学生が、造園学・Landscape Architectureに関心を示すことと重なった。そこで、国費留学生を含む多くの外国人院生を抱えることになり、それまでとは違った研究推進体制を構築しなければならないことになった。そこで導入したのが特定地域学研究である。これは研究対象を特定の地域に固定して様々な手法で解きほぐすというものである。一般的に研究は手法体系を軸に進められ一つの研究室に属すると、研究の方法論が特定され、がんじがらめになることが多い。確かにこれも一つである。しかし研究を通じての人材育成である究極の目的に照らすなら、色々と不都合なこともある。そこで、各人が個別にまとめあげる手法体系を軸とした修士や博士の研究とは別に、共同プロジェクトとして特定地域学研究に取り組むことを提案した。その対象に私の郷里・人吉盆地を設定し、宿泊をは

はじめとする活動の拠点を整備して約10年間にわたり試行した。この間には、台湾、韓国、中国、フィリピン、メキシコ、ブラジル、ペルー、モンゴル、インドネシア、タイ等の学生や研究者が人吉盆地を体験し、彼らは、日本でのもう一つの思い出をつくり、母国に帰り、多くは教育研究者となって次の世代の人材育成に励んでいる。昨年は中国の杭州と大連に、一昨年は韓国のソウルと水原に国際会議のために出向き、彼らと旧交を温めたが、思い出話の多くはこの体験であった。

ところで私は、その貴重な経験をさせてくれた東京農大を退職し平成18年4月に法人化した熊本県立大学の初代理事長に就任することになった。法人化後の大学づくりで真っ先に提案したのが地域実学主義と大学のスローガン「地域に生き 世界に伸びる」である。熊本県が設置する公立大学だから地域貢献度の高い大学にするという初期の目標を掲げ、多彩に学問し、十分な研究体験を積んだ有為な人材を養成しようと意図した。ちなみに、日経グローバルは、本年度の大学地域貢献度ランキングの第一位として熊本県立大学を発表している。

さて、本学にも10年前に環境共生学部が創設され水産系や農学系の教員がこの学際の一員に含まれている。平成20年時点で、環境冠学部は全国に51大学あり、これが冠学科となると約260を数える。まさに環境系学問の爆発(?)である。学部単位で見たとき国立大学に4学部、公立に12学部、私立に35学部が開設されている。国公立大学の数の割合から見て公立大学の12は多い。これは公立大学に当該地域の環境にかかわる教育と研究の使命があるからであろう。また、集計年はずれるが平成19年度での冠学科256の内、国立大学に88、公立大学に23、私立大学に145であり、ここでは国立大学の88学科が目を引き。

ここに見られるように日本の大学教育における環境学の台頭は、大学の地域貢献使命とも密接し、環境学イコール地域学的色彩が強まっている。各大学で地域学の講座が開講されるなど地域学活動が盛んになっている。地域学のさきがけは東北学や京都学であるが、最近では地方だけでなく、東京の真ん中でも

千代田学や渋谷学が聞かれるようになった。これらに共通しているのは地域のアイデンティティを活かした研究への挑戦、これの教育への反映である。そしてこれらが、全国一律の地域づくりの是正に役立ち、地域への貢献とも映っている。地域という言葉は、きわめて概念的な言葉であるため、その空間的広がりには規定しにくい。私はある特性を持ったまとまりのある範囲として捉えている。人吉盆地は、不知火海に流れ込む球磨川の流域で一定のまとまりと特性を有しているからここを特定地域学の対象としたのだ。これらの範囲を歩き眺め、調べ分析し、考察する営みをみんなで共有した。その際「井の中の蛙大海を知らず」では困るわけで、類似した他の地域との比較研究であるとか、全く対照的な地域との比較考察が必要となる。私たちの場合も人吉盆地研究に入る前に、福島県会津盆地での調査研究経験があったことが大きかった。いずれにしても特定地域学研究は幾つもの可能性を秘めている。生産学としての農学に止まらず、生活学としての農学、さらには生命学としての農学へと、別の山の頂が見えてくることにより地域の農業に役立つ農学になるのではないかと思う。儲かる農業は、そのような地域独自の差異化から生まれるのではないか。田舎を持たない人は国際人になれないというセリフをどこかで聞いた記憶がある。特定地域学の経験は、そのことともつながろう。この体験により、情報収集のアンテナも高くなる。今私の大学では、文学、環境共生学、総合管理学の3つの学部横断で天草プロジェクトに取り組んでいる。大学はもともと学部が単位として作られた組織なので、学部自治や学部モンローになりやすい。学部を越えた学問連携があつて儲かる農業に貢献できるのではないか。特定地域学はそんな舞台だと思う。